

# *The Three Ladies of London* における二人の高利貸し

## ロンドンの都市問題とカトリック、ユダヤへの嫌悪

奥山厚子

### はじめに

道徳劇が Shakespeare や Marlowe などの作品に代表されるルネサンス演劇へと変容していった過渡期に作成された Robert Wilson (1540s-1600) の『ロンドンの三淑女』(*The Three Ladies of London*, 1581 制作、1584, 1590 出版、以下『三淑女』)を取り上げ、ロンドン市民の内面に増殖しつつある実生活における排外感情について論じ、劇中に見え隠れするイングランド人のカトリックとユダヤへの嫌悪、そして劇中に二人の高利貸しが登場することの意味を明らかにすることを目的とする。『三淑女』は金至上主義の世の中を寓意的に述べた主筋と腐敗した社会の典型としての脇筋がからまりあいながら進行する。主筋はロンドンを舞台として進行し、脇筋はトルコが舞台となっている。この劇には性格が甚だしく異なる二人の高利貸し、寓意の「高利貸し (Usury)」とトルコ人のユダヤ教徒 Gerontus が登場する。ロンドンを場面に登場する「高利貸し」は、「金銭 (Lady Lucre)」が後の二人の淑女「愛 (Lady Love)」と「良心 (Lady Conscience)」を凋落させるために手を貸すばかりか、貧しい人々に施しをしていた「もてなし (Hospitality)」を殺してしまい、「単純 (Simplicity)」の父親を金が返せなかったことから、死に追いやってしまうという「冷酷非道な高利貸し」という従来からの典型的な高利貸しの人物像そのものである。「高利貸し」は「金銭」の秘書として他の様々な登場人物と関わり、三淑女の凋落への過程と深く関わっていく。同じ高利貸しでも人が良すぎる Gerontus とは全く別の人物像である。しかし、イタリア商人 Mercadorus の著しく商道徳を逸脱した悪徳性に注目されるあまり、なぜ Gerontus のようにそれまでのユダヤ人高利貸しのステレオタイプと乖離した高利貸しが登場したかは、その背景も含めて十分に検討されていない。「高利貸し」とその他の悪党たちの会話からは移民の第二世代、第三世代がイングランド在来の人々にどのように受け容れられていたかが浮かび上がってくる。二人の高利貸しの異なる人物像に迫り、劇中における 16 世紀末ロンドン市民の異なった宗教的文化的背景を持った移民の受容、ローマ・カトリックに対するイングランドの優越感情、歴史的に染み付いたユダヤへの悪感情がなぜ劇中では繰り返し演じられてきたかを考察したい。

### 1. 演じられた高利貸し

1553 年から劇場が閉鎖されるまでの間に上演された劇にはユダヤ人高利貸しが多数登場し、その多くは金銭を巡って登場人物の行方を左右する重要な役柄として描かれている。文学の中の高利貸しは金貸しということに関して言えば、金銭に対する執着が罪とされ、金貸しのあくどい所業に罰が下るとというのが道徳劇から 16 世紀末に至る演劇によくみられる筋書きであるが、ヨーロッパ大陸において既に認められていた徴利が 1571 年にイングランドにおいても認められ、私的金融業は合法的に営業可能となっていたのである。

『三淑女』では三人の淑女のうち一人「金銭」が残り二人の淑女「良心」と「愛」とを没落させていく。「高利貸し」をはじめ、「偽装 (Dissimulation)」「聖職売買 (Simony)」「詐欺 (Fraud)」という金に目がくらんだ悪党たちが「金銭」に近づこうとしている。中でも「高利貸し」は「金銭」の信頼を得、秘書に抜擢され、商人を相手にした金銭の交渉や決済を任されている。信用取引、手形など資本主義経済に不可欠な制度を使いこなし、資本の管理に長けていたユダヤ人は、実際に当時のヨーロッパ大陸諸国では、王侯や領主たちに領地の管理や地代の回収を任されることがあった。一般人を相手に直接お金を回収するという役割が人々のユダヤ人に対する悪い感情に拍車をかけたのは想像に難くない。しかし、ユダヤ人の国際的ネットワークは戦費など多額の資金調達をしばしば必要とした王侯たちにとって魅力的なものであったため、王侯たちはその手腕に期待を寄せていたのである。16 世紀のイングランドでは、ユダヤ人は存在したものの、その数は限定的であった。それにも拘わらず、イングランドではキリスト教徒の道徳観とは相容れない役柄として劇中に登場し続けた。聖史劇の時より劇中ではユダヤ人は恰好の非難の対象として位置付けられてきたのである。当時、ユダヤ人はイングランドからは追放されていたが、「血の中傷」や「儀礼殺人」の噂はまことしやかに流布しており、ユダヤ人を語るエピソードとして使われてきた。ユダヤ人がいないはずのイングランドにおいては「演じる」・「語る」ことによりユダヤ人のイメージが民間に浸透、恒常化していったと思われる。

### 2. ロンドンの経済発展に伴う歪みと淑女たちの凋落

寓意の「高利貸し」以外にも『三淑女』には Gerontus という人の良いユダヤ人高利貸しがいる。イタリア商人の Mercadorus は「金銭」に気に入られたいために Gerontus を騙し、異教徒がイスラム教に改宗すれば、そ

れ以前の債務は免除されるというトルコの法律をもって、Gerontus から返済を求められている借金を棒引きさせることに成功する。加えて Mercadorus はイングランドに外国と国益を損なうような取引をさせている。彼は、生活や工業製品に必要とされるものを海外に流出させ、珍しいが価値のないものをイングランドに輸入させているのだ。また、Mercadorus と「金銭」との会話からは増加する外国人がもたらす家賃の高騰について、イングランド全体の不動産市場の価格が高騰している様子が語られている。「良心」は最終的に家賃が払えなくなり住む家も無くなり凋落して、箒の行商人に身を棄すのだが、彼女の姿は作者が危惧するロンドンの姿そのものではないか。差し迫った社会問題を扱うことは、道徳劇や宮廷を舞台とした演劇が主流であった当時としては画期的であった。しかし、社会の歪の原因を女性の経済観念や移民による人口増加として演じることは、当時深刻であった燃料不足や住宅問題など国家として根本的に改善すべき問題を一般の市民に見えにくくしてしまっただけでなく、諸外国では既に変わりつつあったユダヤ人の経済的役割の重要性への認識が遅れることにつながったのではないだろうか。

### 3. キリスト教徒らしいユダヤ教徒とユダヤ教徒らしいキリスト教徒

Mercadorus は商業倫理を外れた最たる人物として描かれている。彼は、Gerontus に金を借りたまま2年も行方を晦ましていたのである。Mercadorus は借金を踏み倒すことができるならば、トルコ人になることも厭わない。Mercadorus にとって信仰や国籍は「衣装 (apparel)」であり、それらは服を着替えるのと同じように取り換えることができるものなのである。しかし Gerontus は Mercadorus が信仰を守れるように彼を許して自由にやろうと、借金を帳消しにしてやる。Gerontus は相手がどのような人であれ、自分が不利益を受けようとも相手が信仰を守れるように自身の犠牲も厭わない高潔な人物として描かれている。しかし、裏を返せば、これはユダヤ人の地位に対する不安定さを示すものである。Gerontus の申し出に対しトルコの裁判官は、“Jews seek to excel in Christianity, and Christians in Jewishness.”とユダヤ教徒はキリスト教らしさにおいて勝ろうとし、キリスト教徒はユダヤ教徒らしさで勝ろうとする、と二人の様子を見て意味深な一言を漏らす。従来の道徳劇に登場するステレオタイプである「キリスト教徒：慈悲深い」、「ユダヤ教徒：金に貪欲」という観点からは、ユダヤ教徒の Gerontus はキリスト教徒の Mercadorus よりも慈悲深く、キリスト教徒の Mercadorus はユダヤ教徒 Gerontus よりも貪欲だということになる。しかし、キリスト教徒といっても、Mercadorus はイタリア人である。イタリアはスペインと同様、宗教改革の影響をほとんど受けておらず、作者は Mercadorus においてもカトリック教徒を念頭に置いている可能性が高い。批判の対象となっているのは、節操のない信仰態度や商道徳を無視した商取引を繰り返しているカトリック教徒なのである。二場で「高利貸し」と手に手を取って登場する「聖職売買」はローマ出身である。ユダヤとカトリックが手を取り合って登場していることから、どちらも同じ悪徳の対象として見なされていることがわかる。

#### 終りに

『三淑女』ではユダヤ人 Gerontus の人物造形が、それまでの道徳劇やルネサンス演劇の *The Jew of Malta* や *The Merchant of Venice* に登場するユダヤ人の人物像と著しく異なっている。寓意の「高利貸し」はユダヤ人がほとんど存在しなかったイングランドにおいて、それまでの伝統的なユダヤ人のイメージを依然として保持しているのに対し、オスマントルコのユダヤ人 Gerontus は驚くほど情け深い人物として描かれている。ほとんどの場合、非情な悪徳金貸しとして描かれているユダヤ人であるが、Gerontus はこのように極端に慈悲深い人物として描かれているのは、キリスト教徒の高利貸しを作り出すことで、カトリック商人の邪悪さを際立たせるためであると思われる。批判の対象となっているのは、節操のない信仰態度や商道徳を無視した商取引を繰り返しているカトリック教徒なのである。カトリック商人の腹黒さを強調するためには極めて対照的な相手が必要となるが、イングランドの国教徒をまんまと騙される相手とすることは当然ながら好ましくないため、当時の劇中では悪役として定番であったユダヤ人を騙され役に配したものである。そればかりではない。寓意の「高利貸し」と Gerontus は同時には登場しない。当然二人が会話することも無い。これは高利貸しという職業に対して、一方では邪悪な忌み嫌われた職業として位置付けながら、片一方で王侯たちや新興商人の資金調達源や国際的な情報源であり必要とされていたというジレンマを物語っている。しかし、情け深い Gerontus と非道な「高利貸し」が比較されているが、マネーは社会の血脈という考え方をすれば、Gerontus がいかに善良であろうとも、Gerontus の資金がイタリア人悪徳商人 Mercadorus によって、イングランドの国益を損なうような貿易に利用され、結果、イングランドが墮落することに使われていたことには変わりはないのである。

#### 主要参考文献

Hawkes, David. *The Culture of Usury in Renaissance England*. Palgrave, 2010.

Kermode, Lloyd Edward. *Aliens and Englishness in Elizabethan Drama*. Cambridge UP, 2009.

---, editor. *Three Renaissance Usury Plays*. Manchester UP, 2009.